

2021年度

愛知の特別支援教育

(第50集)

も く じ

I	はじめに	2
II	授業実践	
	小学校	3
	中学校	4
III	第71次教育研究活動のまとめ	
1	学習指導をどうすすめるか	5
2	人とかかわる力を育てるための指導	6
3	特別支援教育をどうすすめるか	8
4	助言	11
5	まとめと今後の課題	13

愛知教職員組合連合会 教育課程研究委員会特別支援教育部会

2021年度 教育課程研究委員

ブロック推薦

◎部長 ○副部長

名古屋			尾 張			三 河		
氏 名	単組	学校名	氏 名	単組	学校名	氏 名	単組	学校名
◎田中 洋樹	名古屋	天白養護	岩田 健人	愛知	(長久手)西小	朝倉 貴行	田原	衣笠小
篠田 佳奈	名古屋	二城小	湯浅 直子	尾北	岩倉南小	吉原 智美	碧海	知立南中

第67～69次教育研究全国集会レポート提出者

67次			68次			69次		
氏 名	単組	学校名	氏 名	単組	学校名	氏 名	単組	学校名
○遠島 雅大	稲沢	千代田中	浦野 柚季	蒲郡	形原小	○田口 孝典	海部	白鳥小

第71次教育研究全国集会レポート提出者 新井 雅人 (海部・甚目寺南小)

I はじめに

地域や学校などにおける障害のある子どもたちをめぐる動向は、本人や保護者の教育に対するニーズの高まり、卒業後の進路の多様化、インクルージョンやダイバーシティの理念の浸透などがみられるところである。すべての人が生活しやすい環境をめざす「ユニバーサルデザイン」の考えは、さまざまなところにかされるようになり、障害がある、ないにかかわらず、すべての子どもたちに適切な支援をすることの重要性が理解されるようになってきた。そのため、支援を必要とする子どもたちのニーズを把握し、学校・家庭・地域が連携して支援を行っていくことが強く求められている。

特別支援教育部会では、これまでもさまざまな状況におかれている子どもたちに対して、一人ひとりの豊かな学びのために、どのように教育課程を編成していけばよいか検討を重ねてきた。特別支援教育における「基礎・基本」は「生活する力・生きる力」そのものである。

さらに、子どもたちの主体性や創造性を育てながら、体験や知識をもとに自ら判断し行動できる力を「生きてはたらく力」ととらえ研究をすすめてきた。

本年度の研究においても、子どもの教育的ニーズを的確に把握し、学習意欲を高めるような学習活動や教材の工夫をした実践、人とかかわる力やコミュニケーション能力を高める実践、個々の子どもの発達の状況に応じた生活単元や自立活動の工夫をした実践、子どもの実態についての共通理解や通常の学級への移行支援に関する実践などが報告された。

これらの実践で行われたように、子どもたち一人ひとりのもっている能力や個性を最大限に引き出し、学習の成果が生活にかされていくことで、子どもたちの自信を高め、自立や社会参加の基礎を育てることができると考える。

そして、人とかかわる活動や作業的・体験的な活動を多く取り入れて学習に取り組む中で「生きてはたらく力」を育むにはどうしたらよいか、学習した内容を日常生活にどのようにいかしていくか、教員が子どもたちへの理解を深め、前向きに学んでいけるようにするにはどうしたらよいか、などの観点から教育内容を検討していきたい。

II 授業実践

1 一人ひとりの教育的ニーズに応じた学習支援の充実

ー児童が自ら取り組み、考えを伝えやすくなる環境整備の実践を通してー

長久手市立西小学校 岩田 憲人

(1) はじめに

第5学年である本学級の児童（以下A）はASDの診断を受けている。人前で目立つ行動を避けたがる傾向にある。話したがらず、どうしても伝えたいことがあるときだけ、担任や気を許した友だちの近くで小声で話す。また、授業中は一斉指導が入りにくく、「何をするか」がわからず、何もできずに時間を過ごしてしまっていた。個別に指導をしても「書くこと」が得意ではなく、取り組むことが難しかった。そのため、考えたことを周囲に伝えることもできなかった。そこで、「何をするのか」を明確にした個別指導を取り入れながら「他者へ自分の考えを伝える」ための実践を行うこととした。

(2) 実践の内容

① 絵カードの掲示

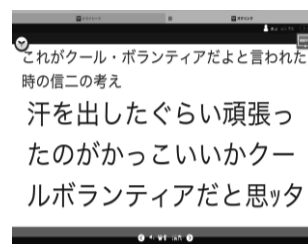
授業で課題を提示した後、Aには個別指導の中で「読む」「書く」「チャレンジ（問題に取り組む）」などの絵カード【写真】を渡した。今がどんな活動をするかを絵で表しながら「この問題にチャレンジしてみよう」と教科書に丸印を付けたり、言葉で補足をしたりした。座席を一番前に配置し、正面にある教卓の壁面に絵カードを貼ることでいつでも活動内容を確認できるようにした。



【写真】絵カード

② タブレット端末の使用

Aは、家庭で携帯ゲームをよくしており、スマートフォンを使うことが好きである。タブレット端末の操作方法は、スマートフォンと共通する点が多いため親しみやすい。文字を打ったり絵を描いたりすることができる他、児童が入力した物【資料】を画面共有し、考えを提示しながら発表することができる。そのためグループワークなど、話し合い活動を行う中でも積極的に活用させた。



【資料】Aが入力した考え

(3) 成果と課題

本実践を行ったことで、Aも活動がしやすくなったのか、学習に向かう姿勢がよくみられるようになった。特に、道徳の授業では、何も考えずに過ごしていたAが資料を読んだり、考えたりする姿が増えた。そして、自分の考えたことを意欲的にタブレット端末に打ち込み、グループの児童へ見せていた。グループの児童から「なるほど。Aの考えもいいね」と言われ、とてもうれしそうにしている姿がみられた。しかしながら、課題自体はAにとって難しいものが多く、基本的には個別で時間をかけて指導しなければならなかった。さらに、タブレット端末を使用することは意欲的であるが、まだ文字を打ったり、絵や図を描いたりすることに慣れていないために、紙に書くよりも時間が必要であった。

(4) おわりに

本実践を行うことでAは、自ら学習に取り組むことが増えた。そのため絵カードの提示は、非常に有効な手だてであると感じた。状況把握にも効果的であるため、今後さまざまな場面で使っていきたい。また、「GIGAスクール構想」により普及したタブレット端末は、Aのように考えを伝えることが得意ではない児童にとって大変有効であると感じた。Aに限らず、学級全体で意見共有がしやすくなったと感じた。今回はタブレット端末を触るのが好きな児童の研究であったが、使うことが慣れていない児童にとっては難しいことではある。個々の児童に合わせた使い方の工夫が必要だと感じた。

2 一人ひとりの力を高める自立活動の指導 －「夏祭りを開こう」の実践を通して－

知立市立知立南中学校 吉原 智美

(1) はじめに

本校は、学区内に外国人が多く住む地区があり、外国にルーツがある生徒の割合が全校生徒の約16.5%在籍している。特別支援学級にも、毎年、4割程度在籍している。3年生のAは、小学校5年で来日した生徒で、現在では、理解できる日本語が増え、覚えた日本語を使って周りの人とかかわろうとすることが多くなった。しかし、自分の思いがうまく伝えられず、諦めてしまったり、相手の意図がわからず、トラブルになってしまったりすることが時々ある。そのような実態から、Aの自立活動の目標を「場面を想定した学習を取り入れることで相手に合わせた言動をとる力をつける」（自立活動の指導内容「3 人間関係の形成（2）他者の意図や感情の理解に関すること」）と設定した。日本語の力も高めつつ、他の生徒とかかわる中で、Aが主体的に活動できるようになることを期待し、本実践を行った。

(2) 実践の内容

① 夏祭りの準備をしよう

ある生徒から、「夏祭りをやりたい」という提案があった。コロナ禍で地域の祭りが行われなくなり、残念に思っている生徒からの意見だった。Aは、夏祭りに行った経験はないが、インターネットなどで夏祭りを見たことがあったようで、「シューティング（射的）をやりたい」と、夏祭りを開くことに意欲を示した。そこで、特別支援学級の各クラスでどんなお店を出すか、そのために、どんな準備をしたらよいかを話し合い、事前準備にとりかかった。

Aの在籍するクラスでは、射的とボールすくいのお店を出すことになった。Aは、射的の担当を選び、的や割りばし鉄砲づくりを意欲的に行った。また、夏祭り当日は、お客さんに道具を渡したりルールを説明したりする役割になった。事前に、クラスの中で店番とお客さんに分かれて練習をする時間をとった。日本語での説明に不安があるAに対して、ネームホルダーの裏に「鉄砲と弓矢のどちらにしますか」、「5回打てます」など、伝える内容がローマ字と平仮名で書かれたカードを入れておいた。Aは、最初は何をしたらよいのかわからず、その場で立っているだけだったが、「お客さんが、やり方がわからないみたいだよ」と声をかけると、ネームホルダーの裏を見ながら伝えることができた【写真1】。その後も、教員が「Aくん、打ち方を教えてください」と声をかけることで、お客さん役の生徒に教えることができた。



【写真1】
伝える内容を確認する様子

② 8・9・10・11組 夏祭り開催

夏祭りの当日は、生徒たちだけでなく、交流学級の担任など、生徒たちとかかわりのある教員にも参加してもらった。練習の中で、自分の役割を理解できたAは、お客さんに「いらっしゃいませ」、「（鉄砲と弓矢のどちらにしますか）」など、自分から積極的に対応することができた。また、弓矢がうまく打てない友だちに対して手を添えて教える姿がみられた【写真2】。



【写真2】
友だちに打ち方を教えるA

(3) おわりに

本実践では、生徒たちが意欲的に取り組むことができるであろう題材を準備し、一人ひとりの課題に合わせた役割を与えることで、Aをはじめ、生徒たちが主体的に活動する場面を多くみることができた。今後も、個々の課題に合わせた題材を設定し、一人ひとりに合った支援内容を考え、継続することで、生徒たちの力を高めていきたい。

Ⅲ 第71次教育研究活動のまとめ

1 学習活動をどうすすめるか

(1) 各研究活動の傾向

名古屋は、「特別支援学校における効果的な道徳科の指導方法」というテーマでの研究であった。「特別の教科 道徳」の目標「自己をみつめ、多面的・多角的に考えること」を、児童が自分の思いを表現する過程の中で、自己をみつめ、友だちと思いを伝え合うことで考え方を広げ、多面的・多角的な考えをもつことができると考えた研究であった。手だてを、自分の思いを表現するために体験的な活動、友だちと思いを伝え合うために発表しやすい場の設定とし、「したいことをするときは一かぼちやのつるー」での実践発表がなされた。人形劇の動画をつくったり、物語の視覚化を行ったりと、体験的な活動を取り入れることで児童は、登場人物の名前や台詞を言ったり、登場人物の気持ちを表現したりできた。また、表情カードを使ったり、登場人物を演じたりと、発表しやすい場の設定をすることで児童は、友だちの考えを知ったり、考えを共有したりできた。児童の変容から、体験的な活動は自分の思いを表現すること、発表しやすい場の設定は友だちと思いを伝え合うことに有効であったと、報告された。

一宮は、「子どもの実態や課題に応じた支援の方法や内容のあり方」というテーマでの共同研究であった。児童が楽しく主体的に数の概念や数と計算を学ぶことができれば、算数の学習に達成感、満足感を得ることができ、これからの自信や、生涯にわたり自立し社会参加する上で基盤となる力につながるのではないかという考えのもとでの提案であった。提案者それぞれが研究主題に沿って算数の数と計算に焦点をあてた実践が上げられており、今回は、毎日の授業の中に取り入れ、継続して行うよさについての実践発表がなされた。単元名は「数となかよし」で、数の概念や簡単な足し算、引き算、かけ算の計算力を身につけることがねらいである。手だては、授業の終わりに必ずすぐろくを行うことと、自作のサイコロを使うことであった。授業の終わりに必ずすぐろくができることを喜び、数の概念を身につけたり、計算に対して自信をもってとりくんだりといった、児童の成長がみられた。児童の成長から、楽しみながら学習していける多くの授業実践を続けていく必要があると提案があった。

岡崎は、「仲間と協力し合い、課題解決に向けて積極的に取り組む生徒の育成」というテーマでの理科の授業での実践発表であった。学習したことや経験したことをいかして考えを深めることができるようにするためには、①「前時までの知識や技能を使って、解決できる課題を設定」、②「既習事項を想起できるようにするための視覚的支援を行う必要」という仮説であった。実践では、生徒に親しみやすいキャラクターを用いたグループ実験を行い、生徒の変容で検証を行っている。生徒の変容として、困っている生徒に、自分から教える姿や協力して実験に取り組む姿、自分の気づきを友だちに伝える姿がみられた。また、学んだことをいかして結果を予想したり、実験の失敗を協力して解決したりする姿もみられたと報告された。生徒の変容から、前時までの学習を使って、解決できる課題を設定することや視覚的な支援をすることは、仲間と協力して課題を解決する力を身につける手だてとして有効であったと提案された。

安城は、「友だちと協力し、どんな課題でも最後までやり通す児童の育成」というテーマでの研究であった。オーダーメイド式の石けん屋さんを開店し、人とかかわる活動やみんなで協力する場を設定することで、仕事に対し責任をもって、どんな課題にも最後まで取り組む児童をめざした実践発表であった。仮説は、場に合った課題を設定することで、最後までとりくもうとすることができる、石けんをつくる過程で他者とかわる場を設定することで、他者と協力しようとする気持ちを育むことができるのである。実践の結果、いつも自分の意見を固持し、他者とかわろうとしない児童が協力し、石けん

販売にとりくんだり、学校生活や授業など、意欲が乏しかった児童が、自ら行動しようとしていたりする姿がみられたと報告された。児童の変容から、場に合った課題や他者とかがかわる場を設定することは、友だちと協力し、課題を最後までやり通す力が身につく手だてとして有効であったと提案された。

(2) 討論の中心

各リポートの発表を受け、最初に、一宮の実践にあった、お金マスターの目標や評価はどのように設定されたかという意見から、算数の実践や目標・評価について意見が交わされた。障害種がさまざまなため、全員がお金の計算することが難しいときには、個の実態に合わせ「お金を出す」「計算する」「両替する」など、目標を設定することが必要であると、意見が出された。算数の実践について、生活の中にあることを交えて実践をすすめている。例えば、ボウリングで百玉そろばんを使ったり、牛乳パックで教えやすいようなものをつくったりと、児童が使いやすい教具を考えているという話があった。その他、畑で収穫した野菜を職員室で販売し、計算が難しい児童は、野菜の数を数えたり、注文を取ったりと、個に応じた目標を設定して取り組ませているという意見が出された。次に、道徳の授業でどのような工夫をしているかについて意見が交わされた。特別支援学校では、実践例が少なく、何をもとに、どんな評価基準にしてよいか悩んでいる。目安になる、評価シートをつくれたらと、自分の学校でも話しているという意見が出された。この意見に対し、道徳の話の聞いただけでは、内容を理解することが難しいため、ペープサートを用いたり、動作化させたりして、話の内容を確認している。通常の学級のようにはすすまなく、具体的に視覚的に授業をすすめている。きまりやルールの内容は子どもたちが理解しやすいと、話があった。また、思いやりの心をもたせるために、話の中では難しいため、ボールを運ぶ具体的な場面を見せ、協力する活動を行ったと意見が出された。さらに、日常の中で押さえていくことがたくさんある。活動する中で、その時その時で、押さえるとよい。教科書を使うことが難しいが、道徳の授業も大切。日々の生活の中から課題を見つけてすすめていくことが大切だと考えるといった意見が出された。

2 人とかがかわる力を育てるための指導

(1) 各研究活動の傾向

名古屋は、「自分の思いや考えを表現する生徒の育成」をテーマに、保健体育のバレーボールの実践を行った。グループ活動の中で、仲間を意識させたいと考え、二つの手だてを用いた。手だて1は、「仲間を意識できる学習課題の設定」である。円陣バレーを行い、仲間と協力する必然性をもたせた。手だて2は、「視覚的な振り返り活動」である。タブレットやチェックシートを活用し、自分の姿を振り返ったり、仲間へのかかわり方の変化を感じたりすることができるようにした。仲間への意識をさらに高めるために、試合を行った。試合に向けた練習では、協力し合えるように、円陣バレーにおいて、5回以内に返す、全員ボールに触るなどルール工夫を行ったところ、前時までに学んだ方法をいかして、仲間を意識して取り組む生徒の姿がみられた。振り返りでは、仲間のよいところを発見し、伝え合うことができた。また、自分の変化にも気付くことができ、これらの手だてが有効だったと提案された。

蒲郡は、「互いのよいところを認め合い、励まし合い、力を合わせて取り組める子の育成」をテーマに、外国語活動の実践を行った。全校でとりくんでいる内容も取り入れながら、子どもたちが興味のもてる題材をと考え、忍者修行という場の設定を行い、レベルアップのシステムを考えた。子どもたちの意欲が高まり、自信がなかったひもをほどく動作や、忍者ポーズをすすんで身につけることができた。また、友だちのよいところを見つけてほしいと考え、ふわふわ言葉の授業実践を行った。友だちが失敗した時に、「ナイス」など、

相手を励ましたり褒めたりする言葉をかけることができ、仲間との関係もよくなってきた。さらに、「忍者ストーンを貯める」「鉢巻きにストライプを巻く」などの活動で、子どもたちが自分の成長を視覚的に実感し、目的意識を持続することができるようにした。実践を行ったことで、一人ひとりが努力を続け、互いのよいところを認め合い、励まし合う姿がみられ、温かい集団づくりにつながることができたと提案された。

稲沢は、「豊かなかかわり合いの中で、互いに認め合い、ともに生きる児童生徒の育成」をテーマに、交流及び共同学習での実践を行った。交流学級での学習において、特別支援学級、交流学級どちらの児童生徒にもメリットのあるかかわりとなるよう、以下のような手だてを用いた。「交流及び共同学習表」で、本人の特性を考慮した目標を設定したことで、教員間で授業の目標を共有することができた。「交流チェック表」で、児童生徒自身が授業の振り返りを行うことで、目標を意識して参加することができ、新しい目標へ意欲を高めることができた。「交流お願いカード」で交流学級の担任に、本人の特性や保護者の願いを伝えることで、具体的な支援方法を共有することができた。「かかわりメモ」「写真メモ」を積み重ねることで、成果と課題が明確化された。また、保護者と共有することで、褒められる機会が生まれ、自己肯定感を積み重ねることができた。今後も受け入れるメリットが感じられる交流及び共同学習のあり方や、交流学級の担任の負担感無く児童生徒を受け入れられるような様式を検討し、学校全体で共通理解していきたいと提案された。

一宮は、「クラスで気になる生徒とのかかわり方」をテーマに、抽出生徒に対する支援を報告した。抽出生徒は、中2女子、保護者の協力が得られにくい。保護者は情緒的な問題があると考えておらず、病院、スクールカウンセラーのサポートは受けていない。2学期に、好きな先生を校門の外で待ち続け、教員が家まで送って行ったが座り込んだり、泣き叫んだりすることが2時間ほど続いた。普段は落ち着いているが自分が好きな人へのみ、強いこだわりを見せることがある。相手を困らせるのではなく、手紙などで思いを伝えるよう促している。手紙を渡すことで、相手からお礼を言われると、よい方法であるとわかるのではないかと考えた。将来的な自立を見据えた指導をめざして、本人にかかわる職員が支援の方法や情報を共有し、同じ方針で指導することで支援を定着させていきたいと提案された。スクールソーシャルワーカー、コーディネーターを通じて、関連機関につなげていくとよいという意見が出た。

愛知は、「問題行動を繰り返す児童とのかかわりについて」をテーマに、2年間の実践を報告した。本児は、2年生で特別支援学級に転籍した。現在6年生である。感情にむらがあり、集団活動への参加が難しい。そこで、本人のやりたい気持ちを優先し、安心できる場所、教員、自主的にやりたい教材を用意した。本人の興味をいかして、へちまのたわしづくり、調理などを行った。本人とかかわる時に大切にすることは、「①感情的に反応しない、②怒らない、③配慮した声かけ、④本人の言い分を聞く、⑤要求の受け入れすぎにならないような頼み方を指導し、それができたら要求に応える」である。学年の活動は、本人や保護者の希望を聞き、できる範囲で参加した。自分で選んだことには、笑顔で参加することができた。成果としては、投薬を止め、両親の協力を得て、徒歩通学をすることができるようになった。本人に問題行動について尋ねると、自分がやったと認め、謝ることができるようになってきた。教員が、児童が思っていることを代弁し、正直に言えたことを認めるなどのかかわりが有効であったと提案があった。

豊橋は、「友だちとかかわり合いながら、伝え合い、表現力を高めることができる子の育成」をテーマに、紙芝居づくりの実践を行った。児童の関心が高い「物語」「絵」を取り入れ、意見を聞いたり、伝えたりする場を設定することで、コミュニケーションの練習をし、よりよい表現の仕方を学ばせたいと考えた。「アドバイスタイム」では、意見の交流が活発になるように、ツールが使われた。「絵カード」でポーズの見本を提示する、「視点カード」でアドバイスのポイントを知らせる、「付箋」に友だちへのアドバイスや自分ががんばりたいことを書いて可視化

するというツールを用いた。製作がすすむにつれ、友だちの意見を取り入れたり、意見を求めたり、学んだことを他の場面でいかそうとしたりする姿がみられた。目的意識をもってかかわり合う活動を設定したことで、主体的に学びに向かい、表現力を高めようとする子どもたちの育成につながったと提案された。

岡崎は、「日常生活と学習との結びつきを実感できる生活単元学習の追求」をテーマに、「秋ショップ」を開く実践を行った。学区探検で、児童が自然に興味を示し、拾った木の実を使ってお店をつくりたいという思いをもったことから、この課題を設定した。お店の目標、交流学級での宣伝の仕方などを話し合い、自分たちの意見をいかすことができた。商品の準備は、算数や国語の学習要素を取り入れ、楽しんで取り組むことができた。目標をもって活動にのぞんだことで、集中でき、意欲的に活動できた。振り返りでは、できなかったことを克服しようと自ら考えとりくんだ様子がみられた。興味関心のあることをテーマとして取り上げ、活動や体験を重視した学習活動を取り入れることで、日常生活と学びを結びつけることができたと提案された。

(2) 討論の中心

各リポートの提案を受け、まず、蒲郡の外国語の実践をきっかけに、意見が交わされた。かかわり合いをするときに、「共通のもの」があるというのがとても大事である、という観点から、言葉・フレーズだけではなく、共通の目標や思いをもつことで、かかわりが円滑に始まっていく、そこに体験が伴っていきとさらに主体的な活動になっていくという意見が出された。ご褒美である「忍者ストーン」をみんなで集めるようにした、通学路探検をするときに、みんなで新しい1年生の家を探すという共通の目的をもたせた、という事例が出された。

続いて、前時までの内容を定着させるための視覚支援について、意見が交わされた。板書で1時間の話し合いの流れを残す、単元全体が見られるような振り返りシートを活用するなどの具体例が出された。また、ICTの活用もすすんできており、自分のタブレットで授業の様子を撮影したり、資料を提示したりする場面などで取り入れているという意見も出された。

続いて、特別支援学級と交流学級の児童生徒のかかわり合いについて意見が交わされた。稲沢では、従来の支援計画や指導計画は文字が多くて、実態が伝わりにくいので、チェックシートを活用している。内容は具体的・簡略化してまとめ、簡単に記入できるようにして負担にならないように心掛けている。特別支援学級の児童と個別にかかわった交流学級の子は楽しかったといえるが、全体には広がっていかないのが現状である。「この子がいてよかったな」という活動を増やしたいという意見が出された。岡崎の実践でも、お店を開いたときに、特別支援学級の児童が臨機応変な対応ができず、困っている様子を見て、交流学級の児童が戸惑っていた場面があったとのことだった。普段は楽しく授業を受けていても、このようなことが起こる。うまくいかない経験をお互いにするのもインクルーシブ教育システムにおいては必要であるので、可能な限り情報の共有をしたい、との意見が出された。

3 特別支援教育をどうすすめるか

(1) 各研究活動の傾向

尾北は、『できた』を実感することで、さらなる課題にやる気をもって取り組む児童の育成」をテーマに実践を行った。特別支援学級においても、一人ひとりの発達段階や特性に応じたプログラミング教育を教育課程の中に取り入れていくことが必要と考えた。すぐに投げ出す子どもたちを変容させたいと考え、遊び感覚で学習できる課題を設定した。そのために、赤ちゃん向けのおもちゃであるイモムシ型ロボット「コード・A・ピラー」を

使用し、スモールステップで段階に合わせた活動を設定した。はじめに、イモムシ型ロボットの使い方を学ぶ場面を設定した。児童一人に一台ずつロボットを用意したことで、子どもたちは思うままにロボットを動かす様子がみられた。動かし方を学習した後は、ゴールをめざしてロボットを動かすことを目標にした。課題をスモールステップで設定した。そして、うまくいかなかったとき、現状を整理したり適宜ヒントを出したりする支援をすることで、失敗をもとにゴールまでの道筋を考えられるようになった。最後は、チェックポイントを通してゴールをめざす活動をした。チェックポイントを通らなかったとき、めあてに立ち戻らせることで課題を確認させた。今まで、ゴールできた経験を積み重ねてきたことで、あきらめずに取り組むことができた。このような児童の様子から、手だてが有効に働いたという報告があった。課題としては、手だてが有効に働かなかった児童もみられ、個々の能力の見取りや課題設定の難しさを感じたと報告があった。

刈谷は、「具体的な目標を設定することで、主体的に自立活動に取り組み、手先の技能を高める子の育成」をテーマに実践を行った。軽度の麻痺があり、細かな作業が不得意な児童に、自立活動でジオラマづくりを行った。その活動を通して、はさみやカッターを使ったり、紙を折ったり色を塗ったりする技能を高めたいと考えた。手だてとして四つ提案があった。一つめは、児童のつくりたい思いを持続させるために、教員が自作したジオラマ「ドリームタウン」を見せ、教員との対話を重ね、構想図を書かせることで具体的なイメージをもたせることである。二つめは、主体的に自立活動を行うことができるようにするために、製作の過程が児童にわかるように提示したり、上達する様子を可視化したりすることで、児童自身が具体的な目標を設定できるようにすることである。三つめは、手首、手先の体操を行うことである。四つめは、巧緻性を高めるため、教具・支援具を児童自身が選び、その教具・支援具の使い方のポイントを二つに絞って指導したことである。このように、四つの手だてを講じることで、最後まで意欲的に製作に取り組むことができた。完成した後は、友だちに作品を紹介する場面を設定した。振り返りには、「最後まで、自分一人でできてうれしかった」「できることが増えてうれしかった」と書かれていて、児童の成長が感じられた。このような様子から、手だての有効性が認められたと報告があった。

西尾は、「学ぶ喜びを味わう—『お出かけ大好き』の実践を通して—」をテーマに実践を行った。経験したことや見通しをもてる学習に興味をもち、意欲的に取り組むことができる子どもたちの実態から、過去の校外学習の楽しかった経験をいかし、みんなで楽しくデンパークへ出かけるために、さまざまな学習課題を解決できるよう手だてを講じた。手だては、三つ提案があった。一つめは、魅力あるテーマ、必要感がある活動や学習課題の設定。二つめは、「活動」の場の設定。三つめは、「協働」の場の設定である。魅力ある「問い」を設定する場面では、デンパークの映像を見せることで、子どもたちにデンパークへ行きたいという気持ちをもたせた。その後、「どんな勉強をするといいかな」と問いかけることで、子どもたちに自分の目標をもたせることができた。「活動」の場の設定では、板書やお助けカードをもとに注文の話型を学習した。「協働」の場の設定では、トラブルが起きたとき子どもたちが困らないように、ミッションを設け自分たちで解決できることを目標にした。ミッションに向き合うことを通して、自分たちでどうすればいいかを考え行動するスキルが高められた。このような成果から、手だてが有効であったと報告があった。課題は、子どもの視点に立って興味をもつことができるテーマを探していく必要があると報告があった。

海部は、『『困り』がある子どもたちへの理解を深め、『これならわかる！できた！』を広げる工夫』をテーマに実践を行った。通常の学級に在籍している「困り」のある児童への配慮、支援にとりくんだ教員の変容を研究の対象にした。二つの仮説が提案された。一つめは、児童の困った行動や、児童の「困り」による行動をとらえた教員は、その原因・理

由を考えると、通常の学級の担任と特別支援学級の担任、そして特別支援教育コーディネーターと一緒にカンファレンスをすれば、「困り」への理解が深まり、「困り」のある児童に寄り添った必要な配慮や支援ができるのではないかと、二つめは、「困り」に気付けるようになった教員は、さらに他の「困り」のある子の指導ができるのではないかと。全校の教員全員が参加するカンファレンスでは、カンファレンスシートを用いて、できるだけ和やかにすすめられた。その中で教員からよく出てくる話の内容には、児童の困った行動は、わがままややる気がないだけというとらえ方があったが、児童の困った行動には必ず理由があるという考えで話をすすめるようにした。その結果、仮説1については、ほとんどの教員が、指示や教材など、どう工夫すればよりわかりやすくなるか、実践の失敗や調整工夫を重ねて児童の「困り」に寄り添って理解を深めることができた。仮説2については、「ていねいに書く」の事例を経験した教員の中には、「もしかしたらあの子どもそうじゃないかな」と、視点や視野が広がっていく事例がたくさんみられた。そのような様子から、手だてが有効だったと報告があった。成果として、授業の内容や課題の見せ方、伝え方が児童にとってわかりやすいものになっているかを特別支援学級の教員に確認しようとする教員が増えて、学校全体が活気づいていったと報告もあった。

豊田は、「子どもの現状をていねいに見取り、ゴールに向けて無理なく段階的に行う支援—特別支援学級から通常学級への移籍支援—」をテーマに実践を行った。2年生から特別支援学級に在籍するAが、4年生から通常の学級に移籍することを目標に、2年生、3年生のときの実践が紹介された。二つの仮説が提案された。一つめは、教員と家庭からの愛情を実感させることができれば、不安を払拭して自信をもつことができるであろう、二つめは、小さな成功体験を積み重ねながら学習活動を展開すれば、通常の学級で生活するために必要なスキルを段階的に獲得することができるだろうというものである。仮説1に対しては、手だてが二つ用意された。仮説2については、自立活動6区分27項目に照らし合わせてアセスメントをていねいに行い、手だてが五つ用意された。2年生の実践では、愛情不足を補うために、保護者と連携して「登下校レベル表」を作成した実践が紹介された。授業に最後まで取り組むために、「見通しボード」を用意することで、徐々に時間通りに過ごすことができるようになったと報告があった。間違いをととても恐れていると感じられるAに「にじいろことば」という合言葉を作成し、計算練習の前に、それらを唱えてから学習に取り組む手だても紹介された。3年生の実践では、授業に自信をもって参加するために学習活動の流れを示したカードの作成が紹介された。また、意思伝達の拡大、子どもどうしのかかわりを広げる手だての紹介もあった。手だてを講じることで、Aはできることを少しずつ広げていく様子が紹介された。現在は、通常の学級で元気に過ごしていると報告があった。

(2) 討論の中心

最初に、尾北の実践にあったプログラミング学習について、苦勞したことやこうした方がよかったことについて質問が出た。ロボットを操作できない児童に、教員がロボット役になり、「先生を動かしてみよう」と呼びかけるという、アナログ的な形ですすめてみた。それを先に行うことで、ロボット操作の理解が深まり、学びにつながっていったかもしれないと話があった。「ビスケット」というソフトを使った実践も紹介された。ICTを使うよいところは、すぐに結果が出ることや自分のやったことがわかる、そして、すぐにやり直せるところという意見が出された。次に、刈谷の実践から、支援グッズについて意見が交わされた。支援グッズをきっかけにして、最終的には支援グッズがなくてもできるようになってほしいという意見が出た。支援グッズの探し方について質問があった。教員自身がつくりながら変えるという例が紹介された。また、支援グッズの道具は、眼鏡みたいなものであり、それがあればできるのであれば、使い続けてもいいという意見が出された。本人がやりたいことを実

現していけるものを、相談しながら一緒に探すことで、子どもは安心する。そして、教員を信頼するようになり、人間関係を構築していくことができるという意見も出された。

5 助言

名古屋市立天白養護学校の工藤高裕さんから、分科会の中心テーマである「豊かに生きるための力を育む」ことをふまえながら、討論の三本の柱に沿って総括があった。

まず、「学習指導をどのようにすすめるか」という柱においては、四本の実践の発表があり、日常生活と関連させた体験的な活動や、場の設定の工夫、子どものもつ知識や経験をうまくいかしながら課題を解決させる工夫、そして、視覚的な理解を促す教材・教具の工夫など、どの実践においても児童生徒の実態に即し、課題を解決していくために有効な手だてや配慮が講じられていたと評価され、このような力は特別支援教育に携わる私たちの専門性の一つだと述べられた。そして、学習指導をすすめる際の指針について指摘された。学習指導要領では、「生きる力」を資質・能力として具現化し、それらを身につけることをめざす教育課程の枠組みが示された。学習指導では、「何を理解しているか、何ができるか」という生きて働く「知識・理解」の習得、次に「理解していること・できることをどう使うか」という「思考力・判断力・表現力」、そして「学びに向かう力・人間性」の3観点の育成を意識した授業改善が求められている。また、学習指導要領では、「きめ細かい学習指導の充実と児童生徒一人ひとりの学習内容の確実な定着をめざすこと」についても示されている。そこで私たちが重点的にすすめていくべきことは「指導と評価の一体化」、具体的には「学習指導と学習評価のPDCAサイクル」だと述べられた。各教科の指導にあたっては、個別の指導計画で、各教科における單元ごとの個別の目標や観点の評価規準を設定し、その達成にむけた指導の手だてや支援、配慮などを検討する。授業実践の後には学習状況を観点別に評価するが、学習の評価は、児童生徒の学習改善だけが目的ではない。設定した目標や観点別の評価規準が児童生徒にとって適切なものだったか、また、指導の手だてや支援、配慮に課題はなかったかなどをていねいに検討し、次の授業改善へつなげることが学習指導では大切だと述べられた。また、各教科の單元における観点別の目標や評価規準は、私たち教職員だけが把握していればよいわけではなく、児童生徒に「何を学ぶのか」「何ができるようになればいいのか」「どのように学ぶのか」といった学習課題を確実に理解させることが必要である。また、主体的な学習態度は、児童生徒が将来、社会において自立し、豊かに生きていくための礎となるため重要であると述べられた。

「人とかかわる力を育てるための指導」という柱においては、七本の実践の発表があり、各教科や交流及び共同学習において、児童生徒が友だちや教職員を意識できるようにする工夫や、自分の思いや考えを伝え合うことができるための場や教材・教具の工夫、そして、児童生徒の実態を考慮し、個々の課題や困り感に寄り添うことで友だちと安心して学習に取り組めるための工夫が報告されていたと評価された。そして、これらの工夫を通して、児童生徒のコミュニケーションを図る力や自己肯定感が高まったと述べられた。また、今回の実践における授業時の活動の様子や振り返りの様子などから、「自分の思いや考えを友だちに伝えたい」「友だちのよさを見つけない」「友だちと楽しく過ごしたい」といった「人とよりよいかかわろう」という意欲の高まりを感じたと述べられた。そして、児童生徒の自立や社会参加を見据え、地域社会との連携に重点をおいた授業のあり方について指摘された。特別支援教育において「人とかかわる力を育てること」とは、他者を意識し、他者を理解し、自分なりの方法で他者からの働きかけに応じたり、自分で伝えたりする力、そして、相手を意識しながらともに行動できる力を育てることである。このような力を育てていくためには、校内のみならず、児童生徒の自立や社会参加を見据え、地域社会との連携に重点をおいた授業のあり方についても検討していく必要がある。学習指導要領においても、カリキュラムマネジ

メントの一貫として、社会に開かれた教育課程を編成し、地域を巻き込んだ授業づくりを推進していくことが記載されている。具体的な活動例としては、学級に地域の方をゲストティーチャーとして招き、地域のことや、地域で積極的に取り組んでいる活動などについて話をいただく機会を定期的に設けたり、児童生徒が地域の活動に参加したりすることなどが考えられる。また、授業でつくった物を地域の方々に、心を込めて直接届けるといった活動もすばらしい。このように、身近な教職員や友だち以外にもかかわりを広げる活動は、今後の児童生徒の社会参加に向け、大変貴重である。地域を巻き込んだ授業をすすめることで、児童生徒の「地域の方ともっとかかわりたい」「地域の方々の役に立ちたい」という気持ちの芽生えにつながる。このような気持ちをどんどん引き出し、「実社会で発揮できる人とかかわる力」をのばしていくことが大切であると述べられた。

「特別支援教育をどのようにすすめるか」という柱については、五本の実践の発表があり、ロボットを使ってプログラミングに取り組ませる実践や、主体的に自立活動に取り組ませるための実践、また、子どもの疑問をもとに課題を解決しながらできたこと、使えるようになったことを実感するまで主体的に学ばせる実践、学校全体で困り感のある子どもへの理解を深め、子どもの自己肯定感を高めるための工夫、そして、自立活動を通して、子どもの困難さを克服し、特別支援学級から通常の学級への転籍移行支援にとりくんだ実践などの報告があり、どの実践もこれからの特別支援教育において、我々が立ち向かわなければならない課題であると評価され、今回の報告の内容は、今後の実践や手だてのヒントとなるものであったと述べられた。そして、今回の発表で多く実践されていた「自立活動」について指摘された。自立活動では、障害のある子どもたちが主体的に、そして豊かに生きていくための力を育むために、今後の特別支援教育において、さらなる指導の充実が求められている。自立活動の指導では、つい、困難さを克服することに重きをおいてしまいがちだが、児童生徒の得意なこともいかしながら、指導をすすめることが大切である。児童生徒一人ひとりが抱えている困難さ、そして得意さはそれぞれ異なる。つまり 100 人いれば 100 通りの自立活動があるということである。このことから、自立活動は、「個別の学習が基本であること」をしっかりと認識する必要がある。また、指導内容を個別に設定するにあたっては、流れ図などを活用しながら、「児童生徒の的確な実態把握」「課題の抽出」「目標の設定」「指導の内容や方法の設定」などに取り組めるとよい。さらに、自立活動の評価を通じて、目標や指導内容・方法が適切であったかを整理し、授業改善につなげていくことで、自立活動の指導がより充実したものになると述べられた。

愛知県医療療育総合センター中央病院の杉山由佳さんからは、学習指導をすすめる際に最も大切にするとよいことは、子どもが取り組む学習を好きになることだと述べられた。怒られながら、嫌いなことを強制されながら学習に取り組む形では、子どもは学習が嫌いになり、取り組まなくなり、成果も出にくくなる。また、教職員を敵のようにとらえ、「その教職員が持ってくる課題は嫌なものだ」から負の思いが發展していき、「この学校は嫌いだ」につながってしまってはもったいない。子どもが学習を嫌いになってしまうことがないように、配慮をすることを大切にしていけるとよい。しかし、支援が必要な子どもは、興味のもち方が個性的であったり、好きなことには熱中できる一方で、興味がないことには取り組むことが難しかったりする場合も多い。学校全体で子どもの実態を共有し、個に応じた学習指導を検討していけるとよい。

「人とかかわる力を育てるための指導」と「特別支援教育をどのようにすすめるか」については、学習面のみではなく、対人面や情緒面での困り感が大きいと述べられた。また、興奮しているときやパニックになっているときには、指導をするという発想ではなくクールダウンに徹するという発想に変えることが大事だと助言された。落ち着いた後の振り返りの際にも、「悔しかったよね」とか「こうしたかったよね」という気持ちの共感が大切であり、こ

の共感が、この人は自分に対して嫌なことを言ってくる人、怒ってくる人ではなく、自分の見方で一緒に考えてくれる人、信頼できる人、という信頼関係につながっていく。この信頼関係が構築されれば、教職員の話を聞けたり、うそをついたり隠したりせずに、「先生」と相談できる関係になっていける。また、発表の中にもあったが、言語的には説明ができるが、気持ちの説明が難しい子どもは多い。感情は形もないし見えないので、感情をイラストカードで示して、一つ一つの感情には名前がついていることを伝えたり、「1番いい時が100で最低が0だったら、今の気持ちはどれくらい」といった気持ちのスケールを用いたりするのも効果的である。気持ちのスケールは、0か100、白か黒で考える子どもが多い場合は、より有効である。そのように気持ちを受け止めた後に、状況を通訳したり、相手の気持ちを通訳したりするとよい。また、場面に合った正しい言動を伝える際には、いつ、何を、どのようにすればよいのかをかなり具体的に伝えることが大切である。「しっかり」とか「やさしく」という言葉は抽象的で難しい。その意味では、本日の発表の中にあった「おーらい」という言葉掛けや「イツ、オッケイ」という具体的な言い方を伝える実践は、子どもにとってはわかりやすいと評価された。さらに、行動療法から考えると、好ましくない行動の時は要求が通らず、好ましい行動の時は要求が保証されることが大切であり、これを実現するためには、特別支援学級と交流を行う通常の学級、学校と保護者、学校と放課後等デイサービスなど、支援者がさまざまところで連携していることが大切であると述べられた。

6 まとめと今後の課題

子どもたち一人ひとりの実態に合った支援の内容や、指導のあり方についてのレポートが数多く提出された。それらの発表を受け、討論を行った。その結果、教育課程編成の基本的な考え方が明らかになった。

- 子どもたちの特性を否定的にとらえるのではなく、一つの個性として前向きに受け止め、働きかけることで、それぞれのよさを認め合える気持ちを育てることが大切である。
- 職員室でも、日頃から子どもたちの情報や個性を伝え合い、教職員間の連携、共通理解が大切である。また、校内での事例検討会やカンファレンスを定期的に行うことで支援のあり方について見直しを行うことが大切である。
- 引き継ぎの方法について、個別の教育支援計画や学習内容の記録を一括して管理して引き継ぐことや、記録のデジタル化をすすめていくこと、直接、出身校や進学先へ出向いて担当者に会うことなど、より連携をしやすくする体制づくりが大切である。
- 子どもたちが主体的に活動する環境を整えるために、個々への励ましの仕方や、スモールステップを取り入れた課題の設定などが大切である。
- 子どもたちの的確な実態把握を行うために、支援が必要な子どもがどのような見方、感じ方をするのかについて研修を継続的に行うなど、子どもが何に困ってその行動を行ったのか、その原因について理解をすすめることが大切である。
- 道徳科の指導について、特別支援学級の子どもが教材の内容をイメージしたり、共感したりしやすくするために、授業だけに限らず、日常生活のさまざまな場面で指導することが大切である。
- キャリア教育の観点において、希望している進学先が自分の特性に合っているか、自己決定ができていかなどの視点で指導することを心がける。また、小学生の頃から、保護者とともに進学先や就労先を見据えた支援を考えることが大切である。

さらに、子どもたち一人ひとりを大切にしたい実践研究をすすめていく中で、次のような課題がみえてきた。

- 各校の実践が、新学習指導要領に照らし合わせたときに、どこに重点をおいているのか、また、各教科を横断した内容である自立活動や道徳教育においても内容をしっかりと整理し、PDCAサイクルにもとづく指導評価を行う必要があるなど、カリキュラム・マネジメントが必要である。そして、通常の学級、特別支援学級、通級指導教室、特別支援学校、さらには進学先の学校が、連続性のある多様な学びの場であるために、学んだことを正確に整理しておく必要がある。
- 子どもたちが行う課題について、その活動を行う子どもたちの動機付けをきちんと見直

す必要があり、子どもたちの思いや意欲、さらに保護者の思いも含めた課題設定が必要である。

- 個々の子どもの実態に応じた支援具は、子どもの発達の一助になると考える。特に、ICT機器を用いた支援の充実は、今後の重要な課題の一つであるといえる。